



明治大学校歌を作詞した 詩人・児玉花外と養育院

栄畑南美(えばた なみ) 老年学情報センター

櫻園通信 59 令和2年5月
東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先: 老年学情報センター

明治大学

「白雲なびく駿河台 眉秀でたる若人が…」で始まる明治大学校歌。東京六大学野球の応援等で、聞いたことがある方もいらっしゃるのではないのでしょうか。この校歌を作詞したのは、詩人・児玉花外(こだま かがい)です。1972年に編纂された『養育院百年史』の年表には、「昭和18年9月20日、明大校歌『白雲なびく』の作者、熱血の詩人児玉花外(傳八)本院にて没(69)」(p.181)と記されています。養育院で亡くなった児玉花外とは、どのような人物だったのでしょうか。



児玉花外

児玉花外(本名: 児玉伝八)は、1874年(明治7年)に京都で生まれました。花外は5歳の時に母を亡くします。新島襄が創立した同志社予備校に進学しますが、14歳の時、母代わりだった姉千代をも亡くしました。その後、慕っていた新島襄も病死し、花外は同志社を退学、京都を出ていきます。仙台の東華学校、札幌農学校、東京専門学校(後の早稲田大学)に入学しますが、いずれも中退します。

花外は、東京専門学校在学中に詩作を始め、『早稲田文学』に寄稿するようになります。そして、だんだんと新進詩人として認められていくのでした。

花外は、社会主義詩人として活動していました。1903年、著作『社会主義詩集』を刊行しようとしたが、発禁処分となり、一躍有名になります。その後は、詩集『ゆく雲』などを発表、文芸誌の詩欄の選者も務め、後進の指導にも当たりました。

明大校歌を作詞したのは、1920年（大正9年）、花外46歳の時でした。当時、花形スポーツであった隅田川の学生選手権ボートレースで、応援歌が必要になりました。三人の明大生が教授の紹介状を持って花外の家を訪問したところ、花外は作詞を快諾したといいます。花外の書いた歌詞に曲をつけたのが、作曲家の山田耕作でした。晩年、養育院に収容されていた花外は、明大関係者の訪問を大変喜んだそうです。子どもがいなかった花外にとって、さながら我が子の見舞いのような感じだったのかもしれません。



1943年 晩年の児玉花外

花外は、最初の妻とは離別、再婚した二人目の妻とは死別しました。また、大の酒好きで酒を飲み出すと止まらなかったといいます。長年の多量の飲酒によって、花外は健康を損なっています。ついに、1934年（昭和9年）、多発性関節炎で東京帝国大学の附属病院に入院することになりました。1936年に帝大病院を退院しますが、引き取る家族がいなかったため、養育院へ移ります。62歳でした。部屋は分室3号棟だったそうです。

花外は、養育院で思いのほか穏やかな生活を送ったようです。窓の外の桜を眺め、詩を作り、印税が少し入った時には、酒を誰かに買いに行ってもらって、こっそり夜遅くに近くの患者たちと楽しんでいたといいます。また、晩年は日蓮宗を信仰し、心の支えにもしていました。

戦時下だった1943年（昭和18年）9月20日、花外は急性腸疾患のため、69歳で亡くなりました。穏やかな最期だったといいます。その後、花外がいた分室3号棟は、1945年4月13日夜半からの東京大空襲によって、養育院本院とともに消失してしまいました。

【参考文献】

石井敏達（1969）「養育院百年史の陰に一児玉花外三十年忌を偲ぶ」

東京都養育院編（1972）『養育院百年史』東京都。

「児玉花外」Wikipedia、<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%85%90%E7%8E%89%E8%8A%B1%E5%A4%96> 2020年5月21日最終閲覧。

「明大校歌誕生の周辺（中村雄二郎）」明治大学ホームページ、<https://www.meiji.ac.jp/koh/o/information/schoolsong/origin.html> 2020年5月21日最終閲覧。

